哲学者の歌う心

アレクサンドル・キセリョフ（訳・渡辺　雅司）

二〇世紀ロシア思想の運命は、恐るべき台風に遭遇した樹齢数百年の古木のいのちになぞらえることができよう。

暴風によって根こそぎにされ、ばらばらになって岩にうちつけられ、ごくわずかな種子だけが、異国の荒れた砂利交じりの土壌に根を下ろす。さほどの歳月が過ぎるまでもなく、これらの種子はわずかながら、若芽にいのちを与え、大多数は跡形もなく死に絶えたとはいえ、わずかばかりの木々は成長し、今目にしているように、幾本かの若木が、この一見不毛な土壌の上で成長していく。

これと同じように、一九一七年の恐ろしい事件の前夜、多様性の中に壮大な統一を示していたロシア思想は、追放先でその記憶だけを残し、西欧哲学の最新流行の潮流に飲み込まれて消え失せることもあったであろう。

だがそうはならなかった。ロシア亡命社会は、その主たる課題であるロシア思想を保持し、再検証し、発展させることを果たしたのである。

亡命先のロシア哲学思想の最も代表的な人物は、モスクワ大学教授のイワン・〔アレクサンドロヴィチ・〕イリイン〔一八八三～一九五四〕だった。一九二二年九月二六日、若くはあったがすでにその名を知られていた哲学者イリインは かの有名な「哲学者の船」で、他のロシアを代表する思想家とともに追放されたのであった。それから数年して彼はこう書く。

「我々ロシア人、反革命である我々は生みの国から強制的に引き離されたのだが、それでもわが祖国から引き離されることはなく、幸いなるかな、これからも引き離されることはあり得ないだろう。」

母方がドイツ人の家系であるイリインはドイツに居を定め、ベルリンにあったベルジャーエフに主導された宗教哲学アカデミーの活動に参加した。それを辞した後も、イリインは 社会評論に多くの時間を割き、著名な政治諸団体で、積極的な活動（一九二七～一九三〇年代に『ロシアの鐘』という雑誌を発行した）を展開した。

長年にわたりイリインは反革命運動の独自のイデオローグとして活動し、最大の亡命者組織であるロシア全軍同盟と緊密な関係を結んだ。しかしながら何人かの著名なロシア亡命者たちとは異なり、彼はナチズムを受け入れなかったため、ドイツから中立国であるスイスへの移住を余儀なくされ、そこで生涯の最終段階を送ったのだった。戦後はしばしば重病だったにもかかわらず、イリインは最後まで自分の仕事を捨てることはなかった。

多くの亡命者が自分たちの活動の展望に幻滅する中で、イリインは宗教、政治、一般哲学のテーマでとりわけ精力的に執筆活動を繰り広げた。有名な哲学三部作が書かれたのもこの時期である。その一部のタイトルともなった**「歌う心」**こそは、この哲学者自身の性格を鮮やかに彩るものとなる。

ミハイル・ネステロフ
『イワン・イリイン』

イワン・イリインは幼少期から読書好きだった。最初はアンデルセンやグリム兄弟のお伽話であったが、自身の告白するところによると、その時以来、彼自身、鉛の兵隊さんのように「泰然自若とした顔つきになってしまった」という。その後歴史に熱中するようになる。

「プルタルコスやスヴェトニウスの作品を父親に音読することが許されたとき、私が初めて古代の英雄たちと出会った時、この瞬間のうれしさよ！」イリインは回想する。

「それらの著作を私は書棚の上の二段から取り出す。そしてその書棚のことを思い出すとき、私はその本が並んでいた上のほうをつい見てしまうのである。私はアリステイド〔アリスティデス〕のように生き、ソクラテスのように死にたかった。しかもそこで私が絶えず思っていたのは自分自身の祖国のことだった。私の最初のヒーローはオランジュ侯ウィルヘルムであり、第二のヒーローはフリードリッヒ大王だった……」

自宅の書架の中段には、哲学者の著作が並んでいた。最良の世界に関するライプニッツの素晴らしい夢がイワン少年を至福で満たした。カントにならって、義務に祈りを捧げ、「子供らしく、理解不能な『物自体』は書棚の暗い奥に潜んでいると感じていたのだった。」

イリインの場合、早くから知識欲というより知識渇望が目覚め、自分自身の内面世界の完成への希求が目覚めたのだった。自分の本棚を彼は「子供時代の精神の寄る辺」の守り神と呼ぶのだった。

イワン・アレクサンドロヴィチは感性、思想、形象の宝庫との精神的出会いを与えてくれた書物に対し敬虔な態度も持って接した。書物の中に彼は明確であると同時に神秘的な現実を理解し、解読せよという声を聞いていく。著者が何を以って生き、何を考え、ひょっとして何を苦しみ、いかにして真理へとたどり着いたかを、まさに解読するのだ。

イリインはこう考える。読書とは、「それが読者と作者とのほとんど肌のふれあいとなるためには 集中した注意力と、形象を通した思考、作家の霊的、精神的行為を忠実に再現する」能力を要求するものだと。

「なぜなら真の読書とは、一種の芸術的洞察であり、それは他者の精神的心象を正確かつ忠実に再現し、その心象の中で生き、それを楽しみ、それによって豊かになる使命を持ち、そうすることのできるものなのだ。それは時空を超えた別離への勝利」だと言ってもよい。

読書文化とは、無駄に時間と労力、気分を費消しないためにも選書能力を教え、植えつけられるものでなくてはならない。ここで必要になるのが、才能ある師、教育者である。生徒が軽い読み物で時間を浪費することなく、知識の探求と自身の内的世界の肥沃化へといざなってくれる能力を持った師が必要なのだ。

言葉に対しては慎重に接しなくてはならない。冗舌家とは言葉の浪費者であり、そうした人に必要なのは単に話相手の耳だけなのであり、彼にとっては話とは響きかわす鮮烈な思想もない空疎なおしゃべりの習慣だけなのだ。才能豊かな話し手の話を聞くことは、満足のいくものであるが、多弁を弄する人の話を聞くことは、忍耐の極みとなる。言葉には独自の病があり、多くの言葉は場違いに発せられ、聞き手の心に届かないものであれば、死んだも同然である。

沈黙は言葉を癒してくれる。イリインはこう考える。言葉少ない人の心の中には内なる秘密の場所があり、そこでは新たなニュアンス、意想外な連想をその後醸し出すために、守られているのである。思想はみだりに跳ね飛ばしてはならない。思想は熟成され、形象の中に

具体化されなくてはならない。思想はそれ自体言葉を要求するまで、静寂の中で熟 成されなくてはならない。

「この世には創造的沈黙というものがある。―とイリインは書く―本当の言葉が紡ぎだされる聖なる静寂が。外へと音もなく自身を導く神をはらめる充満が。自己の内部へと向けられた瞑想、そこでは行為に等しい言葉、言葉にならない行為が生まれるのだ。そうした沈黙があって初めて我々は自分の言葉を回復させることになるのだ。」

イリインの顔は大抵の場合、泰然としているが、世界と人類の不完全さ、彼らの内面的 空疎さ、人生で大事なもの不易なものを決定づける力がないことを思って苦悩していた。 なぜならそうしたものにだけ、自分の労力を捧げ、自分の希望と夢をつなぎとめることが できるのだから。

イリインはこう考える。幸せになるためには、「常に何かを愛し、何かを欲しなくてはならない。しかもそれは幻滅させることがないものでなくてはならない。」

不愉快なことがあるからと言って恐れてはならない。なぜなら自身に耳を傾け、自身の欲求を突き止めることによって、理解すべきものであるからだ。その時初めて不幸は人生行路における道しるべとなり、その道を確かめる一助ともなるのだから。不安は避けてはならないが、不安を前にした恐怖心は、何事であれ創造的霊感を消さないためにも消し去らなくてはならない。なぜなら人間にはいつも霊感と創造のための動因と可能性があるのだから。

人間には初めからこうした資質が付与されている。そしてどんな生活状況であれ、それを目覚めさせ、見失ってはならないのだ。 人生とはあるがままの状態で受け入れなくてはならない。そして自分の日常生活を愛し、 日常性の聖なる意味を見出したものだけが、喜びを得ることができるのだ。

「日々の労働を ガレー船の拷問のように意味を失った強制労働、給料日から給料日までの苦痛として盲目的に受け入れてはならない。―とイリインは書く―自分の職業の重大な意味を理解し、その高邁なる意味の名において職業を大切にしなくてはならない。自分自身に、つまりは自分の職業に、日常に真剣に向きあわなくてはならないのだ。」

日常に退屈を覚えることは人間を貶める。つまりはその人は自分を見出せず、存在の意味を見失っている。「無意味だということは喜びもないということだ。」喜びは祝日からではなく勤労の日常から、職業上の成長を目指すことから大きくなるべきである。日常生活は人間の「精神的健康の一環」となるべきなのだ。人生とは何も成功続きではない。失敗もままある。しかしながら失敗を前にしてうなだれてはならない。汝が生きている限り、すべては修正が可能で、失敗を成功に転ずることもできるということを銘記すべきなのだ。お前の失敗とは他人の目に映った恥じだという感覚を自分の中から断固駆逐すべきである。誰でも必要と思えば勝手に判断するものだ。人をして判断させればよい。……失敗をなめた人はそれを「成功の最良の学校、訓練、未来への教訓」としてとらえるべきである。

「しかし大事なのは―イリインは考える―人生には単なる生活上の成功以上の何かがあるということを忘れてはならない。それはほかでもない自分自身の内面におけるくだらない、虚栄に満ちた卑劣漢に精神的に打ち勝つことなのだ。」

よい気分ばかりの生活を送っている人間というものは実際にはいない。なぜって人生ではそうした気分を損なう多くのきっかけ、原因、

状況といったものがあるからだ。人間たるものそうしたものをあまりにまともに受け止めないことを学ぶべきなのだ。

しかしそれよりもはるかに悪いことは、抑うつ状態が、内面の葛藤から来ることで、その根本原因は意識下に隠れているので、容易に解決できないことだ。内面的葛藤は誰にでもあることなので、それに対しては**「創造的やり残し」**と考えることだとイリインは言う。大事なことは内的確信を身に着け、無意識の抑うつ、スカッとしない気分を克服できる勝利者として自己を確立し、しかも他人の前で弱さを見せないことだと。

必要なのは、自分の内面的状態を統御し、本来隠しておくべきもの、時とともに無に帰すようなものを公衆の面前にさらさないことだ。まさにこのようにして人間としての尊厳は形成されるものなのだ。

才能があるということは重荷である。とりわけ子供の場合は。そういう子供からは何か超自然的なことが期待され、娯楽や悪戯、遊びやのんびりした普通の、健康で子供らしい生活をさせてもらえないからだ。子供にとって、才能あるということは不幸な栄光だ。そういう子供には、才能には限界、可能性というものがあるということを忘れ、特別な要求が課されてしまうものだ。才能ある人間はいつも恥をかいたり、期待に応えられなかったり、高い地位から失墜し、落伍者の一員になってしまい、何か特別なもので世界を豊かにするという使命を果たせなくなることを、恐れる。ライバルの嫉妬心、周囲の者の風評や注目が彼を苛み、いまだ強靭なものとなっていない才能に枷をはめ、ままそれを滅ぼしてしまうのだ。その対極にあるのが、劣等感である。自分自身が無能であると認めることは狂おしい。おまけに悪意を持った人ばかりか、身内の者や友人までもままそれを強調してしまうのだ。

こうしたすべてのことが人生を台無しにし、さながら雷雲のごとく、**「喜びの地平線を覆ってしまうのだ。」**そういう人たちには、自信を取り戻すよう助けてあげなくてはならない。さもないと彼らは人間としての幸福というものを、永遠に奪われてしまうからだ。しかしながら人間というものは悪質で、劣等というレッテルが張られた人に対しては**「奴隷として生まれてきたもの」**のごとくに扱い始めるものなのだ。自分の優越性がはっきりし（それは多くの場合、自分の価値ではなく、他人の欠陥、弱点に乗っかった架空のものであるが）たほうが都合がいいからだ。

「要求されるのはそれと真逆なもの、すなわち穏やかな尊敬、信頼、対等なものとしての付き合いなのだ。社会的な事柄は人間の持って生まれた欠陥すら矯正、修正、緩和し、克服することもできるのだ。そのために必要なのは、一緒に暮らす人の善意であり、心根であり、人生において、信じがたいほどの労力によって万事うまくいく人、失敗だらけの人、多くの場合周囲の人間の影響のもとで、劣等感や自身の精神的肉体的力への自信のなさといったものが固まってしまう人、それらの人達が合わさって力となるのだ。周囲の人間の喧騒は多くの場合、悪辣なものだ。それは人の神経を逆なでし、抑圧し、不安や自信のなさを植えつけ、苦々しい感情を目覚めさせてしまう」ものだ。イリインはこう書く。周囲の喧騒は**「精神的〝虚無〟から生まれる」**と。それは人間をもっぱら外的なものへと引きずりこみ、内面的なものを殺してしまう。つまり人間を否応なく自分自身の声に耳を傾ける暇もなければそうする能力もない唯物主義者に変貌させてしまうのだ。イリインの定義によれば、人間は**「精神的難聴」**になってしまうのだ。人間は自然の語らいや啓示、理性

の静謐を感じられないのだ。なぜって、「**下らぬことが騒ぎ立てるところ、永遠なるものは黙してしまう**」からである。

これに対し否定的な資質としてイリインは好奇心を上げる。それは表面的感情であり、その人自身にとっても周囲の者にとっても重荷となるものなのだ。「**深さを求める人は**—イリインは書く—**見る目を養わねばならず、『新奇なもの』を追い求めず、『旧きもの』を愛さなくてはならない。それゆえ偉大なるもの、本質的なるもの、聖なるもの、神々しいもの、それは古のもの、永遠なるものであるが、見るものにとって常に新たなるもの、恵多きものなのである……**」別の言葉でいえば、学ばねばならないのは、悠久なものを見て取り、それにおのが人生を捧げ、無為やもの知りになるために好奇心を尖らせないことだと。そんなものは半教養で、鼻持ちならない人間の自惚れをくすぐるだけなのだ。好奇心旺盛な人は外見、外面を生きる。彼にとって本質は興味なく、真正の知識の獲得に集中することなく、知識の断片、暇つぶしの憶測、噂、風評といったもので満足してしまうのだ。「**好奇心とは人生の表層化、卑俗化、無神論の源泉である。ぬかるんだ悪路のごとく、それは知らぬ間に人間を破滅の沼へと導くものだ**」とイリインは書くのだった。

憎悪とは精神の病に類するもので、憎悪する当人にとっても不幸である。その人の心は否定することに拘泥し、干乾びていく。「**人間は愛に身をゆだね、われを忘れるとき幸せという。憎悪はこうした幸せを不可能にしてしまう**」とイリインは結論する。そうした心には悪意をくすぶらせる空気が蓄積されていき、それは破壊的、犯罪的な行為となって、今にも奔出する。憎悪を抱く人間は、自分自身を敵から切り離せず、世界を黒い色のもとにみてしまい、制裁を夢見、報復を呼びかける。彼は自分の人生ではなく、憎む相手の人生を生きているのだ。それはいわば天に唾するがごときもので、真っ先に憎悪する本人を破壊する。彼にとって、人生はとめどないいがみ合い、闘争、恨みを晴らすことであり、関係にけりをつけることなので。

憎悪は階級闘争を突き動かし、その闘争に特別の残忍さ、復讐心、非妥協性を与え、国内戦へとなだれ込む。そこでは数百万人の憎悪の奔出が、さながら地震、暴風のようになる。憎悪が大衆ヒステリー、悪しき意思の権利となって全国にあふれる。信頼と誠実さは消える。

「**誰も別人の仮面をかぶり、真の同情を隠すことに躍起となった。**—とイリインは書く—**誰もが二重の擬態に走り、その時々の権力者を半信半疑で賛美する。いたるところ敵あり、いたるところ密告ありの状態なのだ……それは全体的な裏切りの時代、粗暴な清算の時代だった。**」

であればこそ、人民内部に社会的憎悪が蓄積されただとか、その憎悪が絶望へと転じ、絶望が国内争乱の口火となったなどと仮定することは犯罪的である。

階級的憎悪は誤った正義の概念によって増幅される。イリインはこう書く。

「**フランス革命はあたかも人間は生まれながらにして生得的に『平等であり』、それゆえ『同類として』扱わなくてはならないかの有毒な偏見を人類に教え込み、それを代々人類に伝えたのだ。しかしながら正義の本質はまさに同一ならざる人々との同一ならざる付き合いということにあるのだ。**」

もし本当に人々が平等だとしたら、正義とは現にあるものを、均一に分配するということに尽きるだろう。しかし人々は能力、才能、生、労働へのモチベーションという点で、相異なるのである。彼らが均一なものを創造することはあり得ない。正義とは平等というよりむしろ不平等なのだ。それは不平等のなせる技であり、

それは弱者、障害あるもの、運命の打撃に倒れたものを擁護し、助けることを前提とするものなのだ。正義とは社会の品格、社会的デリカシーに発するものであるべきで、それは政治的、社会経済的退廃の袋小路へと社会を導く悪としての全般的な均等性と決別すべきものなのだ。イリインはこう考える。正義には何かこう芸術的とでもいうものがある。それは人間をデリケートなもの、**「社会的なものにし、人間に分というものをわきまえさせ、同苦（同情）へといざなうのだ。」**

ほかならぬこうした理解のもとでこそ正義が涵養されなくてはならない。つまり他者の配慮、困窮、侮辱、悲哀といったものに敏感に反応できる性格の特徴こそ正義なのである。

「しかしながら人生において最も大事なことは—イリインは書く—**すでに発見された正義ではなく、正義を人々が心から求め、誠実に模索しているということを、誰もが確信することなのだ。」**

その時不正義はいわば一時的なもの、つかの間のものとして受け止められ、それは容易に耐えられるものとなり、人々、国家、社会にとっての「脅威」であることをやめるであろう。

自然から切り離された人たちは不幸である。これに対し自然とともにある人は常にその永遠のリズムに組み込まれている。それゆえ農業こそが第一の文化となるのである。農業文化が衰退するところでは、物質生活ばかりか、精神生活まで滅ぶ。根のないどんな文化も偽りのものである。現代世界は生みの大地からますます遠ざかることによって、自らを人工的な枠組みの中に閉じこもるという巨大な危険、自然な居住条件から引き離されるという危険にさらしているのである。そうした条件でこそ人は原初の存在が持つ詩情、豊穣、唯一無二性を愉しむことができるというのに。

現代人は唯物主義に傾斜する。物質的なものが最初のうちは人間の本性として前面に登場し、**「その後は精神的、知的経験を十分配慮しない中で」**、幅を利かすのだ。外的経験、外的関係、感覚的満足、願望だけがまともに受け止められる。宗教観、信仰観も単にほどほどであるどころか、ここには嘘が潜んでいるというゆるぎない感覚が表れたのである。これは**「理論的でなく、実際的な」**唯物主義である。しかしながら、理論家というものは、多くの人たちの既成の気分に答えるこうした実情に乗っかって、抽象的なドグマを創り上げ世界観なるものを形成するのである。こうして生まれたのがマルクス主義であり、戦闘的無神論なのだ。これは空虚なスコラ学ではなく、神に対する信仰よりもずっと容易に理解でき受け入れられる理論なのだ。それは特別な心的気運も、聖なるものに対するおののき、張り詰めた精神的営為、聖なる戒律を破るどんな行為にも必ずや罰が待っているという信仰も求めることはない。神なき快適な日常世界では、魂に目隠しし、実務的な理性、悪魔のような心、眠りこけた良心をもってするほうが、快適だというわけだ。

イワン・イリインは豊かさというものに懐疑的な態度を取り、裕福な人を**「穴の開いた大きな袋を持った」**人と呼ぶ。どんなに詰め込んでもいっぱいにはできない。幸福をもたらす**「満足」**という言葉を発するには特別な力が必要とされる。しかし現実が示すように、この魔法の言葉に到達できるのは、物質的豊かさだけでなく、精神的な豊かさを模索する選ばれた人だけなのだ。しかし精神的追求にあっては**「満足」**という言葉は使われない。知識、文化、博識、いや最も大事なのは、心情の美しさ、人間的温かみ、思いやりの美しさに過剰というものはあり得ないのだから。

貧しさは慰めと助けが必要である。しかしな

がら、人が荒み、自他にとっても必要とされず、人生に意味を見ない精神的貧しさはそれよりはるかに罪深い。その人は精神的に死んでいる。精神の貧困は人を破滅へと導く。救済の道は「外面」、つまり外面的世界からの解放を目指して闘うことである。

人の心というものは、本来虚栄に満ちたものである。それは個人にかかわるすべてのことに極度に敏感であり、侮辱を内にため込む。しかしそれは避けなくてはならない。イリインはこう考える。侮辱を感じやすい人達には、生傷を負った受難者に対するように接し、その真偽を問わず侮辱の重荷をいや増すことなく、慎重に遇するべきである。ここで銘記すべきは、**「孤独のまま、理解されない人、侮辱され、許されることもなく、愛されることもなく、寄る辺なき人として人生を生きるのは全く容易ならざるもの」**だということだ。

イワン・イリインは確信する。人がこの地上で生きている限り、お互いに仲良くし、各人の心に届く道を見出し、相互に助け合うためにまとまらなくてはならないと。そのためには、許すこと、度はずれた自惚れを持たないようにし、たとえ何か自慢するものがあったとしてもそれをひけらかさず、侮蔑心を隠すことも、ため込むこともせず、交流することの喜びを目指し、むろん、相手の中にある人間を尊重すること、これらのすべを身につけなくてはならない。叡知とは小賢しいものではないが、かといって実行するのは容易ではない。自己鍛錬が要求され、自分自身のエゴを抑えることが求められるのだ。お互いに似ていないことがあることを許し合い、他人の尊厳、成功、指導力を認めることを身につけなくてはならない。

このことをしばしば妨げるのが羨望である。イワン・イリインはこう考える。羨望の中には殺人や破壊の本能が眠っていると。羨望とは飽くことを知らない。なぜなら悪意を持つ人間は他人のどんな成功にも妬みを抱き、そうすることで自分の力に枷をはめ、自分自身の創造力やポジティブに世界を受容する能力まで殺してしまう。羨望とは精神の病なのだ。それから守られるには一つの方法しかない。自分自身の脆弱さをほじくり返すのではなく、たゆまぬ仕事によって成功を達成し、しかもその際、自分のことではなく、余すことなく全身全霊を投入している仕事のことを考えること、それを目指すべきである。それは何も自己放棄ではなく、創造、創作を妨げる悪意を捨てることなのだ。妬みとは自分自身を尊重していないことの証なのである。

他者に微笑みかけることを身に着けなくてはならない。なぜなら微笑みとは健全さ、好意、心からの共感の印なのだから。それは汲みつくされることのない表現の豊かさであり、感情の真率さがあって初めて**「人から人への軽やかで明るい糸が伸びてゆく。こうしてすぐさまお互いの好意が生まれる。微笑みが心からの、やさしいものになればなるほど、友情と愛も生まれるのだ。」**

かろみなしに生き抜くことは困難である。このかろみの中に、イリインは**「後天的な重荷を精神的に振り払うことによって得られる一種の自由、力ずくではなく、征服、権力ずくでもなく、むしろ問題を抱えないということによって得られる自由を見たのである。……軽い人間は自由へ逃げ、目をつむって、自分は自由であると夢想する。」**例えば、過去、責任、あらゆる行為からの自由である。それはそれで素晴らしい境地だが、そういう状態は一時的なものである。**「なぜならいつも軽いということは、人生の高潔な意味、深み、神秘、聖なるものからも自由（縁がない）ということなのだから。」**

さりながら**「もし軽さが、またしても我々の**

人生の重荷、憂愁、永遠に続く無益な夢想への神々の贈り物として与えられるものならば、それを春の息吹として喜んで受け取るべきだろう。」

知恵を狡猾さと同一視してはならない。狡猾さの裏には往々にして愚鈍さが隠れているからである。人は誰でもそれぞれに狡猾なものだ。本当のお人よしにはめったに出会えるものではない。なぜなら「**素朴なまでに純粋で、子供のように罪のない人**」は少ないからだ。しかしながら、イリインは考える、本当の狡猾漢とは「**絶えず身構えており、狡猾さを愛し、自分の詭計、トリックを愉しむ人、狡猾さの持つ生活力を信じ、それを叡知だと取り違える人**」である。一本気で、心があけっぴろげな人は、狡猾漢にとっては、生き方を知らず、与えられた可能性を活用できない愚か者と映るのだ。彼はそうした愚か者を尊重せず、軽蔑しているが、心の奥底では彼らの道徳的優越性を本能的に理解し、羨んでいるのである。一本気で純粋な人達に対する、狡猾漢の陰謀の動因となるのが、ほかでもない彼らの道徳的優越性なのだ。狡猾漢はこうすることで自身の優越性、自分が選び取った人生設計の正しさを証明したいと欲する。彼は理論家ではなく、もっぱら自分の利益だけに閉じこもるゴリゴリの実務家である。自分自身の信念など持たず、いつでも以前なされたことに反しても行動し、それを柔軟さ、状況判断能力、状況評価能力と取り違えるのだ。彼は永遠の友情・忠誠を誓うのと同じように簡単に裏切るのだ。狡猾な心では、良心は沈黙し、真実の、深い聖なるものは彼の人生からは消え失せる。「**なぜならかくも多くの狡猾さ、狡知がはばを利かすところでは別の力が支配しているのだから。**」

知性と教養を混同してはならない。目に一丁字もないにもかかわらず、独創的で創造的、人生、自然、人間を感じ取り、理解するそんな生まれつき賢い人はいくらでもいる。そういう人からは、肩書を持った専門家でさえ、学ぶことは多い。なぜって「**学位も百科全書的な記憶力も人間の知性の担保とはならないから。**」イリインによれば、知性の主たる基準は他人の二番煎じではなく、創造的に思索し、意志力と注意力、さらには新しい知識を摂取するため、それらの知識を自家薬籠中の物とするための創造力を集中させる能力である。なぜなら「**考え抜き、理解し得たものを、人間は自分の支配下に置き、創造的に仕上げを施し、自分の《王国》に住まわせなくてはならない**」からである。イリインは書く。「**理性とはこうして見てくると、知覚行為における創造的慧眼であり、知覚対象を全体像、個別性、総合性において創造的に評価する力なのだ。**」直観力を発達させることが必須であり、「**賢者の中で世界の本質が息づき始めるとき、その人は真の叡知を獲得するのである。**」

人間とは孤独なものだ。孤独者としてこの世に生を受け、孤独者としてこの世を去るのだ。人間は「**自分の肉体という密室に閉じ込められた隠者なのだ……初恋から両親の死に至るまで、人生のあらゆる決断、自分にかけられたあらゆる責任、大きな痛みや悲しみは、ことごとく自分の孤独を感じさせてくれるものだ。**」これは過酷な重荷ではあるが同時に大いなる恵でもある。なぜなら「**孤独の中で人は自分自身、自分の性格の力、生の聖なる源を発見するのである。**」と同時に、自分の孤独を自覚する中で、人は自分以外の人々に与える自分の重荷を軽くしようと努めるはずであり、他人に対する愛や共感を示すものなのだ。かくて人の生まれついての孤独は、人々とのつながりを模索し、心からの気持ちの結びつきを得ることを必要とさせるのである。

多くのことにおける精神的合一を与えてく

れるのが、共通の信仰であり、大いなること、聖なることにともにかかわっていることである。イリインはまさにここにこそ、宗教の使命、つまり血が通った魂と高潔な考え、生の目的を持った人々を一つにまとめる原理を見たのである。さもないと孤独は、利己心、エゴイズムといった宗教心のかけらもない濁った波を人に浴びせかけることになるだろう。そして人生を物質的な富と満足だけに突き進む人々の絶え間ない競争へと変じてしまおう。早くもかの偉大な哲学者ホッブスによって定式化された原理、つまり万人の万人に対する闘争（人は人にとって狼なり）という原理が凱歌を上げるか、さもなければサロフの聖者セラフィームがいう通り、人は人にたいし、喜びでなくてはならないとなるべきか。ここにあるのは二つの世界、二つの哲学。心にかなう方を選ぶのは各人の自由に任せられる。

愚かさなしに生き抜くことはできない。なぜなら知性と人生経験、慎重さ、自律心にもその限界はあるからである。愚かさや誤りは有用な修練となるものだ。なぜって人は他人の誤りや誤算ではなく自分自身の誤りに学ぶほうを好むのは周知のところなのだから。そうした誤りや誤算は避けがたいものであり、以後繰り返さないよう自覚し、努力すべきものなのだ。すべてを予見することは不可能だ。人の善意を信じなかったり、人の欠点をよくわきまえないといったかたちで、直感というものは、期待を裏切るものなのだ。

「何人たりとも苦しむことなしには賢くなれない。他人の経験では誰も教え込むことはできない。—とイリインは指摘する—**寛容さとは、本人自身愚かさを乗り越え、しかもそのことを忘れない賢い人間の同情心豊かな善意に他ならない……愚かさとはまさしく後で賢くなれることの証なのである。そうではないだろうか？」**

非難を被らないような人はいない。群衆となった人々は、自分に対してよりも他人に、より批判的になる。非難は、性格の力と立場の確かさ、行動の点検度を検証するものだ。こんな格言が生まれるのもそれなりのわけがある。

「非難にはだれでも耐えうるが、ほめそやしに耐えられるのは聖人のみ。」

非難、それも不当なものも含めて、そうした非難を通じて、人ははぐくまれ、起こりうる危険を警告され、自分のことに思いを馳せることを迫られる。

しかし売り言葉に買い言葉で他人に侮辱を浴びせるようなことは決してあってはならない。この場合、忍耐、精神的平衡、客観的分析は避けて通ることができない。慎み深さ、恭順が非難の対極に立つもので、不完全さから救いだし、自身への信頼を強め、**「自分自身の生命の飛翔の高み」**を獲得するのを助けるのである。これはまた道徳的、精神的成長の一助となるべき悪意を持った人の不当な批判に対する武器ともなる。

論敵を憎んではならない。論敵は愛されるべき人である。なぜなら失敗と誤りの原因を解明し、職業的な成長過程で**「眠り込まず」**労働のリズムを失わず、**「無気力で優柔不断」**にならないために競争を刺激してくれるものとしても必要不可欠だからである。

ライバルは我々の力、気質を強固にし、弱点と欠点をより深く感じさせてくれるものだ。ライバルは人格を伸ばす独自の刺激役である。イリインはこう確信する。どんな状況であってもライバルは一掃されるべきではなく、**「自分の課題、成果の生きた尺度」**として保持されるべきであると。

イリインにとって外見的なものは二次的であり、束の間の、むなしいものである。大事なのは、内面的なものである。つまり創作、達成

の動機と目的であり、新たな陣地の選択なのである。

イリインは確信する。人生とは芸術であり、**「あらゆる芸術というものは、調和を創造する使命を負うている。」**調和に必要なのは、機転、つまり他者の心への格別の気配りであり、高慢、自己満足抜きに他者の人生に**「感情移入」**する独自の才能である。

「こうして機転とは―イリインは書く―**友人、敵も含め、他者を正しく理解するための貴重な芸術〔技術〕であり、それは不必要な侮辱を避け、悪意をかきたてるのではなく、それを鎮め、遠心力を維持するためのものである。」**

別の言い方をすれば、機転に富んだ人は、分裂ではなく、共同を目指し、単に自分の利益に則るばかりでなく、他者の要請にも配慮し、それらに注意深く、尊重をもって接するのである。機転とは不和の原因を作らず、快適かつ平穏に共同生活するすべである。賢く、教養のある人や、機転のきく人は、性格も異なる人々との調和した平衡に絶えず気を配るであろう。

イリインは人間の美徳として**「真の慰めと喜び」**を与えてくれるユーモアをあげる。ユーモアとはプラスの**「魂の電荷」**を持つものである。なぜなら**「それは精神の憂愁からうまれ、おのが痛みを笑顔に変え、そのことによってうつ状態を克服するからである。」**

しかしながらイリインによれば、ユーモアの芸術〔技術〕とは**「自分が苦しい中であえて笑みを浮かばさせる」**ものなのである。別の言葉でいえば、イリインはユーモアの感情をこう解釈する。自身の内面的体験、いや苦悩さえも克服し、それらを超克し、**「ユーモアの慰めを愉しむ、そういう能力なのだと。だって私の痛みや深刻さを他人が知ることはないからである。」**

それは何も手の込んだ秘密主義ではなく、自分を律する能力に過ぎない。そうできるためには性格の力と自分以外の人たちに対する尊敬心が必要とされる。自分でため込んだ痛みや忌まわしい気分を他人にぶちまけず、賢明かつ善意の人を温かみで慰めてくれる笑顔や冗談を贈ることなのだ。ユーモア感情を持った人は、ほかの人たちの気分の良さというものに気を配り、どんな状況でも思いもかけぬ、真心からの笑いを**「釣り上げる」**能力で彼らを和ませるものだ。

しかしこの独自の贈り物も、節度と機転の感覚を要求する。ユーモアとは**「遊ぶ思考」**であり、**「遊ぶ悦び」**なのだ。だが忘れてはならない。このような**「悦びの思考の遊び」**が、戯れる相手に痛みを与えることもあるということを。

イリインの人生のモットーは**「どこに身を置こうと、私は奉仕する」**であった。それも主人、上司にではなく、至高のもの、霊感を受けたものに奉仕するのだ。**「手回しオルガンを機械的にまわす」**のではなく、霊感に打たれ、創造的に回すことによって、生きること、働くことが意味を持つのである。

そこから生まれてくるのが本当の責任感であり、創造への欲求、すべて醜いもの、不正なるもの、偽りのものの否定である。

「すべての偉大なるものは、深く根を下ろしている。それはゆっくりと成熟する。それは人々から深い感情と硬い意志を要求する。―イリインは書く―**自身の信念がとことん堅固とならんと欲求し、自分は忠実さに支えられていることがわかるときはじめて良しと感じることができるそういう人々である。」**

イリインによると忠実さとは偉大な創造する力である。

なぜならそれは**「内から発するものであり、魂の純粋さを前提とするからだ。……もし人が純粋ならば、その人は自分の人生を決定づける**

唯一無二の精神の核を持っており、その時彼は忠実たらんと欲するのだ……逆に心の中に互いに競合するいささかでも『弱い』核を持つ人は、動揺し、不道徳となり、精神的に崩壊し、裏切りと背信へと走る。したがって忠実さとは『精神の統一、精神の全一』ともいうべきもので、そこから内面的な確信が生まれるのだ。」

かくて人は強靭となり、自分の正しさに確信を持ち、行動で一貫し、あらゆる試練の中でも頼りになるのである。

真の忠実さを保証するもう一つの条件がある。それは単純明快、人は愛する能力を持たねばならないということである。愛こそは人間を高め、高貴にし、その人に唯一無二の魅力を付与する。何も愛せない人は、自分自身を見出すことのできない寄る辺なき存在である。自身を含め、その人には大切なものが何もない。人生に強い愛着も、関心もない。すべてが灰色で、退屈で、何よりも精神的に空っぽなのだ。

そしてこの空疎さから知らず知らず性格、感性、良心の解体が始まり、才能は失われていく。なぜなら才能を実現し、発展させてくれる愛すべき仕事がないのだから。こうして冷笑家やニヒリスト、混沌のままに心棒もなく、高潔な人生の目標もなく生きるずばり空っぽな人間が生まれてくるのである。忠実さとは、深みのある性格と強い意志を持った人間の資質なのだ。それゆえ忠実さと愛こそは選ばれし人たる証であり、「**人に真の幸福を得ることを助ける古代の神の息吹の印なのだ。そういう人は神の火花を授けられているのである。**」

愛と忠実さと並ぶのが赦しである。これらの感情はばらばらで生きることはできない。赦しなしには愛も忠実さも存在しない。

だがしかし、イリインは、すべてを赦すということはあってはならないと確信する。キリスト教的愛に則って、「**誹謗中傷、強奪、殺人、幼児虐待、少女売買、祖国への裏切り、ボリシェビキ的煽動等々といった悪行を赦してはならないのだ。**」

苦悩や痛みをもたらす人ではなく苦悩する人々への同情、キリスト教的戒めでカムフラージュされた偽りの偽善ではなく、悪や悪の体現者どもとの闘いが必要とされるのである。

イリインはレオナルド・ダヴィンチのつぎの格言は正確かつ公正だとみなした。「**悪を罰することなきものは悪を奨励するものである**」、骨のないモラリストは、悪行が罰せられないことを大目に見ることで自ら悪をなすものだと。

イリインは罰の不可避性、悪への報復を支持し、意識、無意識の別なく悪を庇護する連中に断固反対するのである。

悪は良心を忘却するところから始まる。良心なしには人生は誤った価値観に従わされ、「**心の聖なる炎**」が次第に消えていくことになるのだ。現代人には「**信念の持つ気力、精神的熱情の気魄が不足している。これなしには歴史上のいかなる大事件も起こらなかったであろう。現代人は一貫性を持つにはあまりに賢すぎる……ゆるぎなく何か一つのことを信じるにはあまりに『教養』がありすぎ、力強くあるためにはあまりに懐疑的すぎる**」彼らの心は太陽のない世界のようだ。

イリインの見解によれば、聖なるものを喪失したことで、人間はあらゆる創造の核を失い、芸術的センス、美的感覚を失ってしまった。だがしかし、人間は確固たる地盤を執拗に求め、相対的なものではなく、確たるものを求めるものだ。このきわめて頼りなく、変転する世界にあって、しっかり両足で立って、我が家を不安定な砂地ではなく、花崗岩の土台の上に建てるためである。

人々には確たる眼力が欠けている。「**この、何かを徹底的に理解し、真理と認定する能力、**

心の中のすべてが真理と一体化するほどに真理に魅了されたこの創造的能力といったもの」が欠けているのである。こうなるためには天賦の創造力、直観力、そして何よりも懐疑心と不安定な見方、世界観、といったものを克服する内面的本質の完全さが必要とされるのだ。しかしながらイリインはこうも強調する。こうした眼力への道は懐疑の先に横たわっていると。そうした懐疑が正しいもので、深いものであるならば、それこそが**「眼力の渇望のもと」**であり、存在の自覚の光と自身の仕事の高潔な意味によって人間を満たしてくれるところの始原の真理なのだ。

人間の心の中に無関心や精神的虚脱状態が巣食わないようイリインは闘った。人間は「歌う心」を持たなくてはならない。こうした心があって初めてその人は自分自身にとっても、ほかの人にとっても悦びとなる。イリインがこう書くのも偶然ではない。

「この地上にあって唯一無二の真の幸福とは、人間らしい心の歌である。心が歌えば、その人はほとんどすべてを得たことになる。ほとんどというのは、その人には自分の心が好みの対象に幻滅せず、黙りこまないよう配慮することが残されているからである。」

「神の広がり（世界）の中から息を吸い、すべての存在物、花粉の一つ一つにまで、いや悪人にすら愛を贈るとき」、心は愛ゆえに歌うのである。**「その時心の中には、創世につながる聖なる血が流れ、脈打つのである。」**

補記　（編集部による）

●原題　Поющее сердце философа.
哲学者の歌う心　（原文ロシア語）

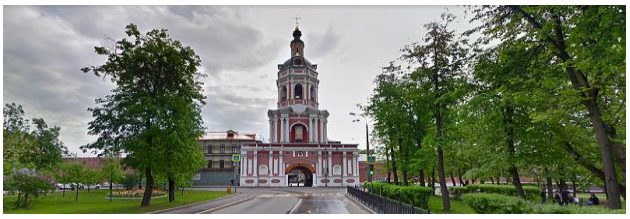
●出典
Киселев А.Ф. - Увидеть Россию заново. (Многоликая Россия. – Одухотворенная Россия).
/ Вступ. ст. Есина С./ М. Дрофа. 2010 г.
A・Φ・キセリョフ『ロシア再見』（「多面的なロシア」「霊感を受けたロシア」）（序文エーシン）、モスクワ「ドロファー（野雁）」社、五九二頁、二〇一〇年刊。

本書は一九、二〇世紀ロシアの十数名の思想家の眼に「ロシアの歴史と進化」がどう映じたかを探る著作。第一部「多面的なロシア」に十九編のエッセイを収録。「哲学者の歌う心」はそのうちの一編。第二部「霊感を受けたロシア」ではパリに亡命した哲学者フェドートフ（一八八六～一九五一）の生涯と活動を語る。

なお、第一部ではイリインの他に特に以下の人々が取り上げられた。フロロフスキー、チャーダーエフ、ホミャコフ、K・アクサーコフ、カレーエフ、V・イワノフ、E・トルベツコイ、ベルジャーエフ、ブランチャニノフ、S・ブルガーコフ、ステプン、フランク。

●著者　Александр Федотович Киселёв.
アレクサンドル・フェドトヴィチ・キセリョフ。一九四七年一二月モスクワ生。歴史学博士、教授。イリイン、フェドートフ、ステプンなど亡命ロシア人思想家の生涯と思想を研究。

●読みやすさを考慮して本文には適宜、改行・行開け、亀の子括弧〔〕を施した。イリイン自身の語、文、文章を太字表記にした。（編集部）



モスクワ・ドンスコイ修道院。この修道院内の墓地にイワン・イリインの墓がある。